宮崎国際大学教育学部紀要 『教育科学論集』 創刊号（2014） 57－71頁

乳幼児親子における試行的生活体験学習実践の考察

相戸　晴子

キーワード：生活体験学習、乳幼児と親、信頼できる大人、興味関心、模倣

はじめに

本稿は、現代の子どもの発達問題にアプローチする、新たな対象や方法論の教育実践を創造していくための研究である。まず、現代の子どもの発達問題の内実を捉え、新たな実践を発想し、試行的実践に取り組む。そして、その結果の考察により教育実践の可能性を探っていきたい。

１．　子どもの発達状況から求められる教育実践

１－１　子どもの発達疎外の状況

近年の子どもは、①視力低下や体力低下等に代表される身体機能の低下[1]、②人とのかかわりの機会減少による人間関係に困難を抱える子ども[2]の増加、③生活の変容により生活体験不足[3]による生活力の低下、④人と共同して取り組む活動機会の減少から、自制心や耐性がない、社会性や規範意識が身に付かない[4]など、子どもが発達疎外を起こしている状況がある。中でも、近年、幼児期からの視力や体力低下や「小1プロブレム[5]」といった幼少接続の問題など、発達疎外の低年齢化が問題視されている。

１－２　子どもを取り巻く社会的背景

時代の急激な変化により、利便性・合理性など「ものの豊かさ」を追求した生活文化を志向した社会は、子どもの生活から多くの体験を喪失させた。また、IT社会の拡充は、子どもの生活時間・生活行動を変容させ、「子どものライフハザード[6]」が指摘されるようになった。また、地域の共同性の崩壊により子どもを見守る機能は低下し、地域のおじさん、おばさんの存在に出会わない子どもが増えてきた。さらに、家族構成や就労形態の多様化により家庭の子育て機能が縮小し、子どもの生活が十分保障されないケースもある。このような、現代の社会的背景[7]が、子どもの「生活」を大きく変容させ、発達疎外をもたらす要因になっている可能性がある。

１－３　子どもの生活を取り戻す教育実践の必要性

正平は、「子どもの生活の中から減少し、やがては失われていったもの（日々の生活に必要で不可欠な直接体験の世界）が教育を困難なものにしている。[8]」ことを危惧し、1983（昭和58）年から30年以上にわたって、子どものふさわしい「生活」を取り戻すための「通学合宿[9]」実践を行ってきた[10]。その実践は、主に学童期の子どもが集団生活をしながら自炊など、身辺のことを自力で行い一定期間学校へ通うものである。

通学合宿では、以下10項目にわたる直接体験－①生活技能体験、②人間関係体験、③挫折・困難・欠乏体験、④感動体験、⑤コミュニケーション体験、⑥勤労体験、⑦道徳的体験、⑧自己決定体験、⑨自己管理体験、⑩自然体験－を体験できるように意識してプログラムが組まれている[11]。どの体験も、これまで生活の中で普通に行われていた体験であるが、現在の子どもたちにはその生活が保障されていない状況がある。今、求められているのは、子どもの生活を取り戻す実践だといえる。

１－４　幼児教育や家庭教育支援における「生活」への着目

2001年「小1プロブレム」[12]が表面化していく中で、子どもの発達疎外の低年齢化が問題視され、幼児期の過ごし方が注目されていくことになる。そして、2005（平成17）年1月28日、中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」のにおいて、「家庭・地域社会・幼稚園等施設の三者による総合的な幼児教育の推進、幼児の生活の連続性及び発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の充実」が提唱され、2006年の教育基本法改正では、第11条「幼児期の教育」、第10条「家庭教育」、第13条「学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力」の条文が、新たに位置づけられた。

2010（平成22）年11月11日に報告された「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について」の調査研究協力者会議報告では、「小１プロブレム」克服への具体的な内容として、幼児の主体的活動を促すこと、幼児期にふさわしい生活を展開すること、遊びを通しての指導を行うこと、一人一人の発達特性に応じることなど、子どもの生活全体における働き掛けや環境醸成の必要性が提言されていた。これは、倉橋惣三のいう「生活を、生活で、生活へ[13]」が保育の基本であることの再提起であり、幼児期の教育においては、家庭生活を含め、総合的に幼児期にふさわしい生活の展開を目指していく具体的実践が求められていることを物語っている。

１－５　乳幼児と親を一緒に支援する教育実践の試み

これら幼児教育や家庭教育支援、また子育て支援を巡る課題を概観すると、家庭・幼稚園等・地域社会において、子どもの豊かな生活を保障し、発達に応じ、また遊びを通した主体的な活動を展開していく実践が求められていると考えられる。また、親への支援は、子どもにとって一番身近な存在であり、子どもの生活基盤を支える立場であることから、子育て支援サービスに留まらず、親が子どもにとっての生活の重要性を認識し、その生活を育むための学びを主体的に取り組んでいく機会を保障していかなければならない。それらを検討した結果、幼児と親がそれぞれ学ぶだけではなく、親と過ごすことの多い乳幼児が、親とともにに豊かな環境の中で、失われた生活を体験してはどうかという発想が生まれてきた。これは、子どもにとっては豊かな環境、失われた生活の体験、他者との関わりの接点となる可能性を意味し、親にとっては、地域の子育て拠点や家庭教育支援の新たな方法論という実践創造を意味する。

１－６　生活体験学習とは

そこで、本研究において試行的に実践する「生活を営む体験」を、「生活体験学習」

という用語で表す。

生活体験学習の研究は、1999年発足の生活体験学習学会や、1975年に発足した谷田貝公昭が代表を務める子どもの生活科学研究会で取り組んできた子どもの生活習慣、生活技術、生活意識研究にその蓄積が見られる。一方、日本生活体験学習学会では、「理論的な共有化・精緻化が図られているわけではなく、実践の成果に学ぶ中で、いかに理論的枠組みを確立するという研究の道程[14]」との到達点のまとめられているように、理論的検討はまだ十分ではなく、目の前の子どもの課題解決から取り組まれている実践に先導され、生活体験学習研究の定義が試みられている段階であることがわかる。また、実践研究においても、学童期が中心の「通学合宿」を中心としたものが多いため、体系的に捉えた実践研究とは言い難い。そこで、これまで生活体験学習実践の対象に位置づけにくかった乳幼児親子を対象に位置づけ、あらためて実践研究の枠組みを捉えなおし、発達段階ごとに子どもに応じた生活体験学習について探っていく研究の一助を目指していく。

２．　調査の方法

２－１　調査実践の概要

本研究における生活体験学習の試行的調査実践は、2013（平成25）年、福岡県子育て支援課主管の事業「福岡県基本的生活習慣習得事業[15]」を受託した、NPO法人子育て市民活動サポートWill主催の「乳幼児おやこ合宿」事業とする。調査実践の概要を、以下「図表１」に記す。尚、本調査でいう「乳幼児」という対象は、「乳児」「幼児」という分け方でなく、就園前の子どもの総称として用いていることを、事前に断っておく。

場所は、飯塚市庄内生活体験学校とした。この施設は、前述したように1989（平成元）年に旧庄内町の通学合宿専用の社会教育施設として設置され、2006（平成18）年の合併以降も、児童を中心とした通学合宿（6泊7日）やチャレンジ合宿（2泊3日）などに取り組んでいる施設である。

図表１　「乳幼児おやこ合宿」の概要

事業名	乳幼児おやこ合宿		
主催	NPO法人子育て市民活動サポートWill　（協力：NPO法人体験教育研究会ドングリ）		
場所	飯塚市庄内生活体験学校（福岡県飯塚市）		
日程	①　事前説明会：2013 年 11 月 18 日 ②　合宿：2013 年 11 月 30 日～12 月 1 日 ※③事後反省会：2013年12月26日	対象	第1子が2歳未満の子どもとその親（定員5家族）
参加者持参	米２合、エプロン、三角巾、手拭き、タオル、子どもの食器（茶わん、お椀、お皿、スプーン、フォーク、はし）長靴、軍手、着替え、健康保険証、母子手帳、		
	【生活体験の内容】 自然体験：施設内外にある植物や虫や動物についての観察、乳幼児親子の外遊び。		

取り組み内容	食事作り体験：畑でとれた野菜も使いながら、乳幼児親子にふさわしい献立を決め調理を行う。羽釜や七輪という原始的な調理器具を使い、電気調理器との味の違いを学ぶ。 清掃体験：ほうき・ちりとり・雑巾を使って掃除することを学ぶ。 循環体験：食べた後の生ゴミで堆肥作りやどんぐりの苗植え等などを行い、自然の循環を学ぶ。 その他：ご飯の食べ方、お風呂の入れ方、就寝や起床の工夫、絵本や歌の楽しみ方など、親子コミュニケーション、親同士の仲間づくりを通して、基本的生活習慣全般について学ぶ。

日程は、2013年10月30日（土）～11月1日（日）の土日を合宿と設定した。約2週間前の2013年10月18日（金）に事前説明会という名目で終日事業を開催した。

参加対象は、第1子が2歳未満の子どもとその親であるとの条件に絞り、募集を行った。初めての乳幼児対象の事業であること、また、施設が乳幼児に使いやすい施設ではないことから、参加者の安全性を考慮し、定員は5家族とした。募集方法は、「図表2」にある参加者募集チラシを作成し、飯塚市・桂川町・嘉麻市で配布や口コミによる声掛けを行った。

図表２　参加者募集チラシ

図表３　合宿に参加した親子について

Aちゃん1才9ヶ月（女）と第1子を育てる母親
Bちゃん1才8ヶ月（男）と第1子を育てる母親
Cちゃん1才7ヶ月（女）と第1子を育てる母親
Dちゃん1才4ヶ月（女）と第1子を育てる母親
Eちゃん1才3ヶ月（男）と第1子を育てる母親

参加した5組の親子は、「図表３」のように、子どもは、AちゃんからEちゃんまで1才3ヶ月～1才9ヶ月、親は第1子を育てている人で、全員母親だった。

尚、事前説明会、合宿の両日において、米2号、調理や食事に必要な備品、野菜の収穫など野外活動で必要な道具、病気やけがなどへの対応に必要な書類は、参加者それぞれに持参してもらった。

内容は、「図表１」にあるように、自然体験、食事作り体験、清掃体験、循環体験という主に４つの生活体験学習に取り組んだ。

２－２　研究の方法

本研究では、アクション・リサーチを用いた。その他、アンケート、親たちがまとめた事業の感想文も参考資料として取り扱った。ここでいうアクション・リサーチとは、

佐藤（1998）のいう「自らが『場』に関与している事実を積極的に肯定し、その関与の事実も組み込みながら『活動』と『場』の変容の過程を観察し、記述する。すなわち、研究者自身の変容も研究対象の一部を構成する。[16]」ことを前提に、南（1997）のいう「外から距離を置いて見ていたのではわかりにくい現象の詳細に立ち入り、行為、できごとの意味を、内部にいる者、あるいは行為者の視点から理解しようとする。[17]」スタンスを用い、研究を行った。

具体的手順としては、事前説明会、並びに合宿当日に、主催者であるNPO法人スタッフの一人として事業に関わり、観察記録の記述や映像記録、その他の参考資料をもとに分析を行った。尚、ここで使う、観察記述やアンケート、画像については、個人のプライバシーに十分配慮するとともに、参加した5組の親の了解が得られていることを申し添えておく。また、本調査実践前の2014年9月には、本事業の主催者であるNPO法人の9人のスタッフの研修を行い、取り組み内容と手順の確認、施設や動線の安全確認を行い、調査実践に取り組んだ。

２－３　分析の視点

全体的な分析の視点では、子どもの発達問題の解決にアプローチできる新たな対象や方法論の教育実践になり得ているかということである。

具体的分析として、一つ目は、乳幼児に効果がもたらされているかである。具体的には、①乳幼児が親と共同の生活体験学習の場に身を置くことに適応できているか、②乳幼児が、親の生活体験学習に取り組む姿に注意を向けることができているか、③乳幼児が、生活体験学習に興味・関心を示しているか、または、やりたがっているか、などである。

二つ目は、親への効果がもたらされているかである。具体的には、④親自らが生活体験学習に取り組み、生活の基本を確認しているか、⑤親が子どもに生活体験学習に取り組んでいる姿を見せているか、⑥親が子どもにとっての生活体験学習の意義を理解することができているか、⑦親が他の乳幼児親子と共同生活することにより深い交流ができているか、⑧親が家庭生活において親子で取り組みたい生活体験学習を見つけているか、などとなる。

３．　結果

３－１　事前説明会

合宿の約2週間前に事前説明会を行った。この事前説明会の実施は、乳幼児親子が施設や人に慣れるというねらいがあり、1泊2日の合宿を円滑に進めていくための重要な事業である。全員が初めてこの施設に訪れたこともあり、子どもは親の側を離れず、親は少し緊張した面持ちでスタートした。スケジュールと内容は、以下の通りである。

図表４　緊張して説明を受ける親子

9:40　受付開始
10:00　挨拶、事業説明、自己紹介
10:30　ワークショップⅠ「子ども観察」
11:00　施設見学（屋外施設、屋外施設の使い方説明。）
11:30　昼食作り（ご飯、だご汁、ホイル焼き、春菊のおひたし、しいたけ焼き、レタス）
13:00　昼食、後片付け、堆肥作り
14:00　ワークショップⅡ「親自身による合宿の企画立案」
15:30　終了

受付開始後、親子は、生活体験学校の生活棟の和室に集合し、開会の挨拶後、「図表４」のように、主催者より事業の説明を聞き、参加者全員の自己紹介を行った。自己紹介では、親と子の氏名、子どもの年齢（月齢）、住んでいる地域の紹介を行った。この時間、5人のうち3人の子どもは、親の膝に抱かれるか、側を離れようとしなかった。2人の子どもは、親の見える横の部屋でスタッフと遊び始めた。親も、2組は顔見知りであったが、その他は初対面のため、会話は少なかった。

次に、同じ和室を使って、「ワークショップⅠ：子ども観察」を行った。これは、参加した5人の親が、自分以外の子どもを3分間無言で観察し、メモをとり、発表し合うという活動であった。ここでは、5人の親が、それぞれ4人の子どもの表情、手にしているおもちゃ、遊んでいる動作、親や他の子どもとの関わりについてなど、語り合われた。そして、親に「子ども観察をしてどんなことを思いましたか？」と尋ねると、「こんなに集中して、よその子どもを見たのは初めて」との言葉でわかるように、第1子の子どもを育てる親たちは、歩き始めで目が離せないこの時期、周囲の子どもや子育てを眺める余裕が持てていないことがわかった。しかし、この「子ども観察」では、プログラムとして集中して観察する場を保障していったことによって、「みんなそれぞれの個性があること」「たった3分間の間で子どもたちはたくさん行動し、発見していることに気づいた」「自分の子どもをそんな風に見てもらうこともなかったので嬉しかった」「普段から自分の子どもに対して、もっとよく見てあげたいと思った」などの感想が出され、わが子以外の子どもを眺めることで気づいたことがたくさんあったことが伺えた。そして、それまで子どもが離れなかったり、泣き続けたりして自分の側を離れなかったAちゃんとCちゃんの親は、「子ども観察」後には、子どもに困惑していた顔から、泣いているわが子を優しく受け入れようとするまなざしへと変化が見られていた。

図表５　施設内外の見学と説明

次に、屋内外の施設見学と使い方について説明を行った。しばらく室内の活動が続いていたため、子どもたちは、親と一緒に外に出て嬉しそうだった。歩いたり、抱っこされたりしながら、20分くらいか

けて屋内外を一周した。「図表５」のように、子どもたちは、親の側で、または抱っこされながら、言葉を理解しているかのように、スタッフの説明にじっと耳を傾けている様子が見られた。

次に、昼食づくりに取り組んだ。生活棟内では、親が羽釜炊きご飯、だご汁、春菊のおひたしを作っていた。生活棟の外では、スタッフが七輪を使って、子どもたちが収穫したしいたけと魚（ホイル焼き）を焼いた。最初、親の側を離れなかったBちゃんとCちゃん、そして活発なEちゃんが、七輪に近づき関心を示し出した。まず、パチパチ焼ける様子や、ホイル焼きから湯気があがる様子を「図表６」のように、Bちゃんはじっと見ていた。また、七輪の下の空気穴に向かってうちわで風を送る作業をしている大人の姿を見ていたEちゃんとCちゃんにうちわを渡すと、見様見真似でうちわを回し始め、「きゃっ、きゃっ」と声を出して喜んでいた。

図表６　七輪に興味を示し真似をする子ども

昼食の献立は、「ご飯、だご汁、ホイル焼き、春菊のおひたし、しいたけ焼き、レタス」である。少し時間がかかってお腹をすいているような子、眠たそうな子もいたが、みなで食卓を囲み、食べ始めた。子どもたち自身がうちわで風を送って焼いたホイル焼きやしいたけ、また、畑から収穫したレタスも美味しそうに食べていた。親たちは、羽釜で炊いたご飯の美味しさに感動していた。食後は、主に親たちで後片付けを行った。生ゴミは、堆肥作りの小屋へ運び、堆肥に混ぜた。

午後は、「ワークショップⅡ：親自身による企画立案」として、スケジュールや内容など、親自身が合宿の企画立案を行っていった。なぜこのようなワークショップを設定したかというと、こちらから与えた生活体験学習プログラムを「やってもらう」のではなく、子どもの生活をつくる主体であることを自覚してもらいたかったからである。乳幼児の一番身近な親たちが、企画を通して、子どもとの生活をどのように作ったらよいのか、この施設の特性を活かして親子でどのような体験ができるのかを話し合った。最も長く時間を費やしたのは、生活時間をどう設定するかであった。1才半前後の子どもの生活時間を考慮しながら、起床時間や食事時間、体験活動の時間などを決めていった。この間、子どもたちは昼寝をしたり、親の見える室内で遊んだりして過ごした。こうして、次回の本番の合宿のイメージを親たちすべてが共有したたところで、15時半、事前説明会を終了した。

３－２　合宿

事前研修会の約2週間後に、合宿を実施した。親が企画立案したスケジュールと内容のため、確認のみですぐに活動に入った。また、今回2度目とあって、親たちは、打ち解け

ている様子であった。子どもは、AちゃんとCちゃんが、なかなか親の側から離れなかったものの、3人の子どもたちは親の見える範囲で遊び始めた。

【１日目】

10:00　開会、挨拶

10:20　野菜の収穫、動物の餌やり

11:00　昼食作り（煮込みうどん・追加でポテトサラダ）

12:00　昼食、後片付け

14:00　お昼寝（子ども）、フリートーク（親）、おやつ作り（さつまいものきな粉和え）

15:00　おやつ

16:00　夕食作り（ご飯、手作り餃子、春雨スープ、杏仁豆腐）、動物の餌やり（うさぎ）
風呂焚き（薪を割って、焼べる。）、

18:00　夕食、 後片付け、堆肥作り、翌朝の食事の下ごしらえ、入浴

20:00　挨拶、就寝（子ども）、フリートーク（親）

図表７　小学生の野菜作り教室の様子

開会と挨拶終了後、親子で野菜の収穫作業に取り掛かった。この日は、午前中、庄内生活体験学校で小学生の野菜作り教室の事業が行われていたことから、乳幼児たちは親とともに、小学生の活動に自然に合流し、一緒に畑で収穫作業を行った。子どもたちは、畑の周囲をうろうろしながら、親が収穫しているところに、近づいたり離れたり、また一緒にレタスをちぎったりしていた。野菜は、小学生の手を借りて、里芋、じゃがいも、レタスを収穫した。

11時過ぎから昼食作りを始めた。献立は、「煮込みうどん」のみであったが、収穫したじゃがいもを使って、親たちが「ポテトサラダ」を追加で作った。子どもたちは、親の側で調理を見たり、室内で遊んだり、小学生の野菜作りの活動に参加したりと、それぞれ活動した。

12時過ぎから昼食を食べた。子どもたちはたくさん動いたせいか、しっかり食べた。食べた後は、後片付けをする親を見て、「図表8」のようにDちゃんとEちゃんが自然な手つきで台拭きを行っていた。後片付けは、2度目の調理のせいか、親の手際がよく、短時間で終了した。

13時半以降は、子どもたちのお昼寝の準備を整え、親たちが添い寝しながら寝かせた。少し時間差はあったも

図表８　台拭きをする子ども

のの、子どもたちは、概ね14時頃から昼寝した。

14時からは、親たちのフリートークの時間であった。親たちは、腰を下ろしてしゃべるというより、おやつ作りをしながらおしゃべりを楽しんでいた。この日のおやつは、「さつまいものきな粉和え」であった。1才児代の子どもは、1回の食事ではたくさんの量がとれないことから、おやつにおいても、栄養を摂取できる献立にされていた。15時以降、昼寝から起きた子どもはおやつを食べた。

16時頃から、親や夕食の準備を始めると、子どもたちは、少しずつ親から距離を置いて遊べるようになっていった。施設環境に慣れ、周囲の大人（スタッフ）への信頼関係も育まれてきたせいか、緊張や不安の表情が見えなくなっていた。そして、スタッフが屋外の活動をするため靴を履きだすと、Aちゃん、Cちゃん、Dちゃんの3人の子どもが自分も靴を履いて外に出たいと言い出した。そこで、周囲の大人が靴を履かせ、親やスタッフと外に出た。

図表９　うさぎへの餌やり

Cちゃんは親と昼間活動を行った畑に行って、「図表９」のように、野菜のくずを拾ってきては、繰り返しうさぎに餌をあげていた。

その後、スタッフが風呂焚きを始めると、AちゃんとDちゃんの2人が、近づいてきた。薪置き場から薪を運び、薪割りをして、風呂焚き場で薪を焼べるという、風呂焚きの一連の作業をじっと見つめ、子どもたちも同じことを真似し始めた。「図表10」のように、少し離れた薪置き場に行き、スタッフから持てる大きさの薪をもらうと、両手で大事そうに抱え、風呂焚き場まで運んだ。そして、風呂焚き場で薪割りをしていたスタッフと同じように石に腰掛け、薪割りをしたがるため、スタッフがナタに手を添え薪割りさせた。面白かったのか、何度も何度も繰り返し薪割りをやった。また、割った薪を火に焼べた際、炎がボッと燃えるのを見て、目を見開き、両手を挙げて炎を表現するようなしぐさを見せた。この作業を、Dちゃんは1時間近く没頭して取り組んだ。

室内では、夕食の調理が行われていた。「図表11」に見られるように、Bちゃんは、親の側で夕食の餃子の具をまぜる動作を見様見真似で取り組み始めた。また、調理が終わ

図表１０　風呂焚きをする子ども

ると、親が食器を洗っているところに一緒に立ち、一緒に洗っているかのようなしぐさを見せた。

図表１１　調理と後片付けを行う子ども

18時なると、出来上がった夕食を全員で食べた。献立は、ご飯、手作り餃子、春雨スープ、杏仁豆腐であった。食後は、親たちが中心に後片付けを行った。Eちゃんの親の提案で、翌日の朝ご飯の仕込みも同時に行うことにした。5人の親が協力して、片付けと仕込みを一気にやり終えた。

19時以降は、DちゃんとAちゃんが焚いた風呂に、準備が出来た親子から入浴した。大人でも4～5人程度入ることのできる大きさなので、2組一緒に入ったり、他の親やスタッフと入る子どももいた。お風呂に入っていない親たちは、協力して布団を敷いた。

20時になり乳幼児の寝る時間となった。眠たそうな子、疲れている子、また、少し興奮している子など様々だった。親たちは、16畳程度の和室に5枚の布団を引き、子どもを寝かしつけていった。布団の上で絵本を読んだり、お話をしたり、添い寝をしたり、電気を暗くしたりしていた。すく寝た子、なかなか寝ない子などそれれぞれであったが、親たちはり方で丁寧に寝かしつけていた。

子どもが寝た後は、子どもの声が聞こえる隣の部屋で、親がおしゃべりする時間を設けた。途中、入れ替わり立ち代り子どもが目を覚まし泣き出すと、その都度わが子の声に瞬時に反応し、子どもの元へ急ぐ親の姿があった。おしゃべりでは、今日一日の作業を一緒に取り組んだことで、親たちの交流が深まっている様子を見ることができた。

【２日目】

7:00　起床、挨拶、洗面、朝食作り（炊き込みご飯、みそ汁、白和え）

8:00　朝食、後片付け、昼食作り（ピザ生地作り）

10:00　自然散策（どんぐりや落ち葉拾い、動物の餌やり、野菜の収穫、ピザ釜の火入れ、

11:30　ピザ焼き

12:00　昼食、後片付け、堆肥作り

13:30　ふりかえり、アンケート、掃除（風呂、トイレ、洗面所も含む）

14:00　閉会

2日目は、「7時に起きられるかな」と不安がっていた親たちが、6時半頃からエプロンをして台所に集まり、朝食作りを始めていた。前日の夜に仕込みをしていたこと、親たちこの施設の台所に慣れてきたこともあり、予定よりも早く出来上がった。

通常8時頃に起きている子どもたちは、人の気配を感じたからか、7時以降に起き始

め、7時半には全員の子どもが起きていた。目が覚めた際、家ではないことに、戸惑う様子もほとんどなく、スタッフや親と挨拶を交わすことができた。洗面を済ませると、慣れた様子で活動を開始した。

親たちが布団を上げ始めると、4人の子どもたちが集まり、「図表12」のように、じっと見ていたBちゃんは、枕を押入れに運び、親たちが入れた場所と同じところに、枕を入れている様子が見られた。

図表１２　大人に混じって布団を片付ける子ども

図表１３　ピザ生地をこねたり遊んだりする子ども

8時頃、全員で朝食を食べた。献立は、炊き込みご飯、みそ汁、白和えであった。炊き込みご飯の具には、里芋、じゃこ、ごま、ねぎ、しいたけ、きざみのりであり、必要な栄養素が一品に含まれていた。

朝食の片づけが終わると、昼食のピザの生地作りを行った。しばらく発酵する時間が必要なため、あらかじめ計画していたように活動に入る前に行った。子どもたちが、見やすいように、手を出しやすいように、座卓の足を折り、ピザ生地作りの場を作った。また粉が落ちてもいいように、ブルーシートを敷きつめた。親子5組で始めると、「図表13」のように、BちゃんとDちゃんが、熱心にピザ生地作りに取りくんだ。2人は、大人のしぐさを見様見真似してこねたり、粘土遊びのような行動をとったりした。ちなみに、D

図表１４　「秋の宝物を見つける」散歩をする親子

ちゃんは親とは違うテーブルに行き、Bちゃんを見ながら、こね続けていた。

ピザ生地作った10時頃から、親子とスタッフ全員で施設の周辺にある公園まで散歩に出掛けた。当日は小雨模様であったが、「秋の宝物を見つけにいこう！」とビニール袋を持参して、施設の外に出た。「図表14」にも見られるように、普段は余裕なく過ごす親たちが、身近な自然の中にゆったりと身を置き、子どもと語らいながら、またスタッフのサポートを受けながら、野に咲く花や木の実や葉っぱ、小さな生き物に目を向けている様子が伺えた。親子の様子では、最初は泣いて親から離れなかったCちゃんが、ウキウキした様子で親の前を歩いて散歩に出掛けていたり、親と一緒にタンポポの綿毛を飛ばしたりしていた。また、スタッフの見つけた野草を眺めるBちゃん親子、ドングリを手にして誇らしげなAちゃんの笑顔が見られた。

11時過ぎから、屋外に設置してある釜で昼食のピザ焼きを行った。朝、こねていたピザ生地に親子でトッピングをして、自分の作ったピザを昼食として食べる。ピザは、一度に2枚ずつピザ釜に入れ、約5分焼いていく。焼き上がったピザを、それぞれ食べていった。

昼食後、全員で食事の後片付けと二日間にわたって使用したすべての部屋の掃除を行った。また、2日間に出た生ゴミは、堆肥小屋に持って行き、堆肥に加えた。2度目の作業により、親も手慣れた手つきで運び、子どもも興味深そうに覗き込んでいた。

図表１５　堆肥小屋に生ゴミを入れる親

最後は「終わりの会」として、ふりかえりと簡単なアンケートの記入・回収を行った。

自由記述アンケートには、「野菜の収穫、うさぎのえさやり、まきわりなど、家ではしてあげられないことを経験させてもらえて、子どもの目が輝いていたと思います。」「自分でしたい事をさせてやらないといけないと思いましたし、その中でいろんな成長をみていきたいです。」と子ども自身が自らの意思で生活体験に取り組むことの大切さや、取り組んだときの目の輝きに気づいた様子が述べられていた。また、「広い心で子どもに接することができたらいいなと思います。自分の家事ばかりで、子どもの気持ちを考えていなかったと思うので、見せていければいいなと思います。とてもよい経験になりました。」など子どもにとって自分がモデルになるという自覚の芽生え、また、「親子のつながりを感じた。大多数での食事がとても楽しく、おいしかった。子どもたちが年上だったので、これからの成長を思いえがけた。」などよその親子を観察することによって自分の子育てのふりかえりができ、少し月齢の高い子どもたちと一緒に過ごすことによって成長を見通す視点を持つことができていた。また、感想の語り合いでは、「子どもが泣いても、みんなが大丈夫という姿勢でいてくれたので、不安だった気

持ちはいつのまにかなくなっていました。」「最初は泣いてどうなることかと思ったが、すぐに慣れたので、すごいなと思った。」など、参加前は親に不安があったけれども、みんながつくった安心できる雰囲気により不安が払拭されていたことや子どもの適応力に驚く様子が語られていた。こうして、合計3日間の事業はすべて終了した。

また、親の提案により、約1ヶ月半後の12月26日、一品持ち寄り食事会を行い、再会した。写真などを見ながら、合宿の思い出を語り合った。親戚やきょうだいとの再開のような雰囲気の中で、寝食をともにし、共同の体験をしたことによって、乳幼児や親同士により深い交流をもたらしていたことが伺えた。

４．　結果の考察

以上の結果から、乳幼児と親の生活体験学習実践についての考察を行う。

４－１　循環する生活体験学習実践の環境で生活体験の主体者に移行していく乳幼児

参加した親子は、1日の事前説明会と2泊3日の合宿の合計3日間を、屋内施設と屋外施設を持つ生活体験学校で過ごした。

家庭では、風呂のスイッチを押して沸かす、購入した食材をガスや電気などで調理する、ゴミは指定されたゴミ袋にすべて入れ捨て回収してもらう生活が多くなった。そこで、合宿では、外で薪を割り、釜に焼べ、風呂を沸かす。畑で収穫した野菜を使っての料理、土間や屋外で釜戸や七輪を使った料理、燃料は手作りの竹炭を使って調理する。また、ゴミは多くが生ゴミであり、ビニールで回収してもらうゴミはほとんど出ず、堆肥づくりの場所に運ぶなど、自然の中で循環する一連の生活体験に取り組んでもらった。

事前説明会や合宿の最初は、泣いている子どももいたが、生活体験の活動が始まると、次第に親の側から離れることができるようになり、生活体験の活動を「見たい→触れたい→やってみたい」というプロセスで生活体験の実践主体に移行していく姿が見られた。そこでは、教育される客体としての乳幼児ではなく、自らが好奇心や興味・関心から屋外と屋内の生活環境を分け隔てなく自由に行き来きし、遊びや模倣を通して生活体験につながる行動に取り組んでいくという学習する主体者としての乳幼児の姿であった。

分業や外注への依存の感覚が浸透していない乳幼児の頃から生活体験学習実践につながる環境を保障していくことは、現代社会における生活を失ったことによる子ども問題の解決に向けて、有効な実践になる得ることができるのではないだろうか。

４－２　信頼できる大人と一緒に生活体験学習実践に取り組む効果

乳幼児期の子どもには、安心・安全で信頼できる大人の存在による安全基地を基盤に行きつ戻りつしながら、活動範囲や人間関係を拡張していくことができる。本事業に参加した乳幼児たちは、見知らぬ場所、見知らぬ人たちという不安を抱いて共同生活を開始することによって、泣いたり、側を離れなかったりして、自分の親との安全基地の再確認をしていた様子だった。そして、自分の親があらためて安全基地であることを確認

したり、ここのは安心・安全の信頼できる大人の存在が他にもいることを実感していったりしたときに、さらに多くの信頼できる大人と生活体験学校で過ごす行動範囲や活動時間、活動内容などが広がり充実していた様子が伺えた。

信頼できる親やスタッフと一緒に生活体験できる環境を醸成していくという実践は、乳幼児の子どもたちが、人との関係基盤であり子どもの行動基盤である安全基地を育みながら、より主体的学習を豊かにする実践のしくみだといえる。

４－３　親にとっては安心できる場により多くの気づきがあった

親たちは、この実践で多くの気づきを実感していた。まずは、自分の子ども、一緒に参加した子どもをあらためて観察することにより、子どもを多角的に理解することが出来始めていた。また、他の親子の様子に触れることができたことから、多くの子育てのモデルに出会うことが出来ていた。また、3日間にわたって親子で生活体験に取り組んでいったことにより、子どもの適応できる力や子どもの出来ることを広げる力に気づいていた。親自身が「できない」「無理」と思い込んでいることを、子どもが身をもって実践していた。さらに、子どものイキイキと取り組む表情や笑顔は、「やりたいこと」を体験さていく大切さを実感させていた。これらは、家庭生活の中だけでは気づきにくく、この実実践の環境によるところが大きい。これらの気づきは、生活体験に取り組んだことによる学習成果と捉えることができる。

そこには、親がこの事業によって気づきがあったというより、事業を通して、実家のような安心感に包まれた空間や時間が保障され、食卓を囲み、団欒を楽しみ交流できたことによる成果ともいえる。

おわりに－新たな教育実践の可能性－

本稿は、乳幼児親子に試行的生涯学習実践の可能性を探る研究に取り組んだ。乳幼児にとっては、信頼できる大人の存在があり、自然の中で循環する生活体験学習実践の環境を醸成できれば、興味や関心、好奇心が大いに刺激され、遊びや模倣を通して、結果として生活体験につながる行動に取り組み、主体的学習者に移行していく可能性をみることができた。親にとっては、安心して子どもと一緒に生活体験学習に取り組む空間や時間を保証することができれば、多くの気づき＝学習をもたらしていくことがわかった。

しかし、試行的な実践ということで、調査の日数やアンケートなどの研究方法に課題も見つかった。本研究では、実践終了後、継続して子どもの生活を取り戻す実践につながっていったかどうかまでは把握することはできなかった。そこで、次の研究では、合宿だけではなく、継続した生活体験学習実践に取り組み、子どもに与える効果、親に見られる効果をより丁寧に探っていく方法を検討する。

これらの成果と課題を試行的実践から本格的実践につなげ、乳幼児期の環境醸成が子どもの育ちを支援するという新しい教育実践を創造すること、また乳幼児の親にとっては新たな家庭教育支援、子育て支援を創造していくことを目指していきたい。

[1] 平成 13 年 4 月 11 日に文部科学大臣から諮問を受けた中央教育審議会答申「子どもの体力向上のための総合的な方策について」などを参照。

[2] 内閣府、平成 26 年版『子ども・若者白書（全体版）』第 3 章「困難を有する子ども・若者やその家族の支援」などを参照。

[3] 1996（平成 8）年 7 月の中央教育審議会第 1 次答申「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について」での「合宿通学」、1999（平成 11）年 6 月の生涯学習審議会答申「生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ－青少年の〔生きる力〕をはぐくむ地域社会の環境の充実方策について－」を参照。

[4] 例えば、福岡県教育庁「青少年に関する意識及び行動調査」2001（平成 13）年、において「模範意識の低下子どもの現状」が報告されているなど。

[5] 東京学芸大学の調査（代表大伴潔特別教育研究経費・平成 20 年 3 月）調査対象は、全市町村教育委員会とし、そのうち回答を得られたのは 1,156 市町村。本調査の定義において、「小 1 プロブレム」とは、「入学したばかりの 1 年生で、集団行動がとれない、授業中座っていられない、話を聞かないなどの状態が数ヶ月継続する」とされ、その定義が現在一般化している。

[6] 瀧井宏臣『こどもたちのライフハザード』、岩波書店、2004 年。

[7] 2005（平成 17）年 1 月 28 日、中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」

[8] 正平辰男・永田誠・相戸晴子『子どもの育ちと生活体験の輝き－これまでの通学合宿これからの通学合宿－』あいり出版、2010 年、2 頁。

[9] この「通学合宿」は、子どもの生活崩壊への危機感の高まり、「生きる力」が謳われた 1996（平成 8）年 7 月の中央教育審議会第 1 次答申「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について」での「合宿通学」の例示や、1999（平成 11）年 6 月の生涯学習審議会答申「生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ－青少年の〔生きる力〕をはぐくむ地域社会の環境の充実方策について－」を具現化する事業に位置づけられたことにより、2002 年は全国約 800 箇所で実践されるプログラムとなった。

[10] 「通学合宿」は、1978（昭和 58）年に子ども会指導者連絡会のメンバーが中心となって「通学キャンプ」事業を立ち上げ、1989（平成元）年に福岡県嘉穂郡庄内町（当時）の社会教育施設「生活体験学校」設立後は、この施設で「通学合宿」を行っている。合併後は、飯塚市「庄内生活体験学校」という名称になった。

[11] 横山正幸・猪山勝利・正平辰男『子どもの生活を育てる生活体験学習入門－福岡県・庄内町のこころみ－』、北大路書房、1995 年。

[12] 新保真紀子『「小 1 プロブレム」に挑戦する』、明治図書、2001 年。

[13] 倉橋惣三『幼稚園真諦』倉橋惣三文庫 1 、フレーベル館、2008 年。

[14] 上野景三・永田誠・大村綾「生活体験学習研究の理論的到達点を探る」『生活体験学習研究 Vol.13』日本生活体験学習学会、2013 年、2－3 頁。

[15] この事業は、福岡県（主管課：子育て支援課）が、福岡の子どもたち健やかな成長や発達において生活習慣習得が必要であるとの認識から、平成 25 年度 6 月 1 日より 10 ヶ月間にわたって、県内 57 のすべての市町村（政令市の福岡市・北九州市、中核市の久留米市を除く全て）において実施された。左図にあるように、この事業の財源は、国の緊急雇用対策を活用している。

[16] 佐藤一子他「アクション・リサーチと教育研究」、東京大学大学院教育学研究科紀要、第 44 巻、2004 年。

[17] 中澤潤、大野木裕明、南博文編『心理学マニュアル観察法』、北大路書房、1997 年。